

虹立ちて
— 水谷先生との思い出 —

三木 紀人

大学における水谷先生とのかかわりは10年間に及ぶ。長いような短いような、どちらとも決めがたいその間は多事多端をきわめ、当然のことながら、さまざまの思い出がある。さしあたってここでは、それに先立つ違い記憶ともっとも新しい話題とにしぼって小文をしたためたい。

ふりかえてみると、先生とのご縁は35年前にさかのぼる。ご縁といっても、著者に対する読者としての一方的なものである。

昭和35年、その頃の私は大学院修士課程にあって、中世の隠者文学、ことに鴨長明の『方丈記』に関心を向けていた。周知のようにこの作品は「ゆく河の流れは……」と始まり、その他、川に対する長明の心理的固着をうかがわせる徴証が多い。十数年後に論文を書くことになるその問題に気付きつつあった私は、川に関する作品を手元に集めており、その立場で、水谷先生（当時未婚で旧姓須藤であられた。ちなみに肩書は国際基督教大学助手）訳のマーク・トウェーン『ミシシッピーの人びと』上・下（鏡浦書房刊）と出会ったのであった。今は亡き友人Sの家で徹夜して写真の現像・焼付をした帰り、三軒茶屋の店頭でこの本を見付けたおりの情景はなぜか鮮明に覚えている。

先生はお茶大英文の西崎一郎教授と連名でそれまであまり知られなかった大作の本邦初訳をなさったのであるが、簡潔にして適切な解説を上巻末に書いておられる。学界・出版界の風習では、硯学と若手の、ことに師弟関係にある二人の共同作業は前者のみの成果のようによそおわれることも多いのだが、この共訳書は例外である。まだ30歳の若さで名が表紙に明示してあるのだから、相当にすぐれた方で、恩師からも格別大切に扱われているのだろう。そんな風に私はひとりぎめして、若き女性研究家の聡明かつ魅力的な風貌を思い描いていたものである。

そして、その約四半世紀後、はじめて水谷先生にお目にかかることになった。昭和61年、それまで英文科所属であった日本語日本事情担当教官として先生が着任されたときである。先生はもちろん新進の英文学者ではなく、日本語教育

学界の屈指の大家となっておられたが、若々しく魅力十分で、昔、私の想像どおりの方であつたらうことはすぐにわかつた。私はひそかに安堵し、我が想像力にやや自信を持ったりしたのであるが、それもひと昔前の思い出となつてしまつた。歳月の迅速さは、まことに、長明らの言うとおりでである。

本年三月、先生在任の最後の時をしみじみと過ごした。そうした中の一日、博士課程人間文化研究科の年度末の会議で先生の退任のご挨拶が行われた。その直前から窓ごしの外の景色が暗くなつてゐたが、先生が起立されると同時に雷鳴がとどろき、はげしい雨が降りはじめた。ご挨拶はいつものように声がよく通つて、外の騒音はほとんど支障とならず、むしろ、大学にとってかけがえない方の退任を劇的に印象付ける効果音のように聞こえた。

先生のお話そのものは淡々としており、この際言い残しておきたいといった、それこそ雷のようなものとほど遠く、さわやかな印象が残つた。その印象をな お味わいながら会議の後、研究科棟を出、われわれは雨あがりのキャンパスを歩いて帰つたが、その後まもなく、東南の空に虹が現れ消えた。私はそれに接して唐突に、

虹立ちて忽ち君のあるごとし

虹消えて忽ち君のなきごとし

の二句を思い出した。この句の背景、および、先生とわれわれの関係は、シチュエーションにおいてまったく別であるが、ただよう惜別の情に一脈通ずるものがあるような気もする。先生とこれからもおりにふれてお会いできると知つていながら、そんなことがしきりに思われてならない。